

慈雲

7号

2008/09

真宗大谷派 慈雲山 瑞蓮寺

慈雲会

〒604-8214

京都市中京区新町通蛸薬師下る

百足屋町375番地

TEL/FAX (075)221-4616

zui renji@nifty.com

SinsyuuOotaniha

JiunzanZui renji

Jiunkai

守 知
退 進

【表紙の言葉】

ちしんしゅたい
知進守退

「進むを知りて退くを守る」

中国の曇鸞大師の『論註』の中の言葉で、菩薩の求道の姿勢を表しています。

私の母校 大谷大学の正門をくぐってすぐ横のあまり目立たないところにこの言葉が刻まれた石碑がありました。

当時は意味がよくわからなかったのですが、何かしらこの言葉には惹きつけられるものがありました。

後に東本願寺前々ご門主の句仏上人の字であることを知りました。

私たちが聞法・求道していくのに、妨げるものが三つあります。そのうちのひとつが「自分の樂を求める」、つまり自分のことだけに貪着することです。

また逆に、その求道を妨げる三つを離れる門も三つあります。智慧門・慈悲門・方便門です。そのうち智慧門の中の言葉が表紙の「知進守退」です。これは「進んで衆生を濟度することを知り、小乗の自利主義に退かないように身を守る」という意味です。

ここで注意すべきことは単に進むことがよくて、退くことが悪いと誤っているのではないという事です。人間には進むこともあれば退く時もあるからです。

知進守退という智慧によって「自分の樂を求めない」ということなのですが、いちばん怖いのは自分が樂を求めているという自覚がないことです。

現代でいえば、この頃新聞をにぎわしている汚染米の問題をはじめ、私たちはあらゆる分野で「自分の樂を求める」とのみに終始しているのではないのでしょうか。

ではどうしたらいいのでしょうか。

人間は悲しいことに、自分ではなかなか我が身の姿を見ることはできません。

そのような時大切な事は、自分のことばかり考えていたなと気付くことあります。

そう気付くことができたならば、それは智慧門のはたらきなのです。

「知進守退」という言葉は自分の求道が本物かどうか、問われている言葉であり、また私たちの生活を見直す言葉でもあります。

九月に入ってから久しぶりに感激するようなコンサートに出会いました。

『チョン・ミョンフン指揮のスカラ・フィルハーモニー管弦楽団』のコンサートです。

西宮の木造のホールの中で奏でられる音楽はとても温かみのある音で、耳に心地よく響きました。

またチョンさんの指揮は表現がとてもハッキリしていて、チョンさんはこの曲はこんな風に受け取っておられるのだろうなあともちらにも伝わってくるような指揮でした。

一曲が終わる度にその曲で主となる演奏者に対する賞賛もチョンさんが心から感謝しているのが私たちにもわかりました。

演奏を聴きながらふと思ったのは、素晴らしい指揮と演奏ではあるけれど、指揮者と演奏者だけではこのコンサートは成り立たない。そこにはその演奏を素晴らしいと聴きとってくれる者があってはじめて成り立つ世界だと感じ、いまわたしもその一員であると思えました。

指揮者は自分の音楽を理解し演奏してくれるオーケストラに感謝し、オーケストラは聴衆に感謝し、わたしたちは素晴らしい演奏をしてくれた指揮者と楽団に感謝する。会場がひとつになったいいコンサートでした。みんなに敬意を表して生まれてはじめてスタンディングオーベーションしてしまいました。

たまたま頂いたコンサートのチケットだったのでありますが、その場に居合わせたことを有り難くおもいます。

【息子の遺志】

蜂須賀 舜治

30年前の7月26日、京都は灼熱の太陽が照りつける暑い日だった。

7歳の息子は交差点を左折してきた市バスに轢かれて短い生涯を終えた。運転手の確認不十分が原因だった。次男の息子は三人のなかでも小柄で俊敏だった。兄の誕生日祝いのケーキを買ってくるよう家内に言われ、ケーキを抱えて家路を急いでいたと思う。

何故ケーキを放り出して逃げてくれなかったかと思っただが、息子にしてみれば、迫り来るバスの恐怖と大切なケーキを壊してはいけないと思えば、嫌な嫌なでしまったのだろう。それが不憫でならない。

事故の報を聞いて家内は半狂乱になって収容先の病院へ走った。しかし、その時息子はもう何も言ってくれなかった。一緒に死にたいと思う気持ちを、残された息子のことが頭をよぎり家内は必死に耐えた。

当時サウジアラビアのリアド駐在員だった私は家内に一言「私が帰るまで

絶対に焼くな」と。当時リヤドから京都の家まで一日半かかった。乗り継ぎ便を待つカラチのホテルで私の涙は涸れ果てた。息子の遺骸を見ても一滴の涙も出ず、何も喋らず茫然と白くなった息子の顔を長い間眺めていた。

孫の死を知って父は慟哭した。

無病息災だった父は2年後息子の後を追うようにして亡くなった。

当時働き盛りだった私は時間的に十分な供養をしてやる事が出来なかった。町内にお地藏さんが無かったので、屋敷の一角にお地藏さんの祠を建てて寄付した。間もなく市バスの前方降車口の扉が下まで透明になった。それ以来市内で痛ましい子供の交通事故は聞いていない。

長い間運転手と市交通局を恨んでいた私が、今年皆が嫌がる市政協力委員を買って出た。少しでも人の為になりたいと思っただけである。このことを浄土の息子は「父さんよくそのような気持ちになってくれたね」と喜んでくれるに違いない。

お寺を巡り、仏様を拝みながら、穏やかな心境で息子の待つ泉下へ旅立ちたいと思っている。

【夏休み】

松岡佳子

周山街道を走ること40分なつかし匂いがする。私の幼いころの母の田舎の匂いだ。母は十一人兄弟だったので私には大勢の従兄弟がいた。夏休み、それぞれの親に連れられて、丹波の母の実家に集まる。近くの川へみんな泳ぎに行き、帰って来ると井戸から冷やした西瓜が丸ごと出てくる。

いたずら盛りの男の子が誤って井戸に落ち、叔母たちが必死で助けたこともあった。夜になると近くの集会所で村中総出の盆踊り。そのころは戸もみんなあけばなっしだったから、昼間の遊び疲れで寝ようと思ってもスピーカーから流れてくる音頭でなかなか寝られない。子供心に「もうこんな田舎にくるのはやめとこう」とうつらうつらしていたことを思い出す。

くわがた、カナブン、玉虫、かみきり虫、いなご、バッタ、まる虫、私たちの幼いころあんなにたくさんいた虫

私たちはいったいどこへ行ってしまったのだろう。このごろはかたつむりでさえ見かけない。

京都から一時間、ようやく着いた美山でも極端に生き物が少ない事に気がつく。こんなに緑がたくさんあるのに……

山や木々、草花、川に囲まれているのに……

私は時々思う。

たったひとつだけ望みが叶えられるしたら……

あの十才のころの私に、
あの夏休みに一日がけ戻りたいと……



【お知らせ】

お磨きみがのご案内

十一月 五日（水）午前九時より
十二月十九日（金）午前九時より
本堂の仏具みがのお磨きをいたします。

報恩講のご案内

十一月 九日（日）午後二時より
報恩講のお勤めをいたします。
法話 平原先生（大谷高校宗教科
教諭）

【編集後記】

西宮の御門徒の家にお参りに行くといつも外孫の葵君が御両親と一緒に来ています。小学二年生です。曆から引き続いて歴史に興味をもった葵君が夏休みを利用して、瑞蓮寺に参ってくれました。当寺の歴代住職の記録がのった書物や、近くにある本能寺跡など2、3ヶ所を案内し、その日は京都の親戚の家に泊まりました。後日、葵君から次のお便りが届きました。

ずいれんじさんへ

この前は歴代のごじゅうしよくの名まえがかいてあるたいせつなしよもつを見せてもらってありがとうございました。

ずいれんじさんが18代ときいてびっくりしました。

京とはむかしのことがいっぱいあつておもしろかったです。ありがとうございます。

大西 あおいより